



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

P1 人生は、これから！

P2 入学式 P2～3 本科生の横顔、授業紹介

P4～5 本科ゼミナール紹介

P6～7 専攻科ゼミナール紹介、受講生の声

P8 図書館紹介、異文化研究会、バードウォッチング、としまコラボ

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」

編集責任：千石英世

編集長：堀本恵子

発行日：2013年9月15日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



「人生は、これから！」

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任教授
鳥飼 玖美子



立教セカンドステージ大学の皆さんと一緒にしていると、豊かな人生経験を積んで、これから新たな世界に飛び込もうという、あふれるほどの意欲とエネルギーを感じます。これこそが人生のセカンドステージに欠かせない資質だと、いつも励まされる思いです。

私の嫌いな日本語に、「もう年だから」があります。友人から来た年賀状に、「お互い、もう年だから、無理しないでやりましょう」などと書いてあるのを見ると、元旦から何だかがっかりします。そして、この常套句を聞く度に、「コップの水」論を思い出すのです。

コップに半分の水が入っています。それを見て、「もう半分しかない」と思う人と、「まだ半分ある」と考える人と2種類いて、前者は悲観主義、後者は楽観主義だと言われます。認知言語学では、「半分が空っぽだ」(half empty)ととらえているか、「まだ半分は残っている」(half full)ととらえているかは、その人がどのように自分を取り巻く世界を切り取って解釈しているかが言葉に表れる、と考えます。

これは、言語が思考に影響を与えるという意味では、重要な視点です。「ああ、もう年だから、今

さらこんなこと出来ない」と口にするのは、そのように考えているからなのでしょうが、言葉に出すことで、その意識が強まり定着することがあり得るでしょう。日本人が「もう年だから」「いい年をして」などと言うのは、年齢を意識する文化を反映しているとも考えられますし、日本語が年齢を意識する言語なので日本人は年齢にこだわる、ということもありそうです。

これは外国語と比べると顕著です。例えば英語という言語は、年長であるか年下であるかをそれほど気にしないので、「姉妹兄弟」の上下を表現するにはいちいちelderとかyoungerをつけなければなりません。年配なのに派手だとか、若いつもりであんなことをする、というような年齢による縛りがほとんどありませんし、年齢差別(ageism)を嫌うのが英語圏の社会です。日本も、80歳の三浦雄一郎さんがエベレストに登頂したように、だんだん年にこだわらない社会になっていくでしょう。

セカンドステージ大学に集まる皆さんは、これまでを大切にしながらも、すべてに前向きです。だから授業であれ何であれ、刺激を受けることが多く楽しいのです。

人生、これから。第二の青春の真只中にいる皆さんと、これからも大いに学び合い、語り合っていきたいと願っています。

(立教セカンドステージ大学運営委員)

入学式

新しい出発と出会い
2013年度

学び直しのスタート



春雨の中、立教セカンドステージ大学（RSSC）本科6期生（100人）、専攻科5期生（52人）の入学式が、4月3日（土）午前10時半から、池袋キャンパスのチャペルで行われました。

夫婦や家族連れも見られ、始まる前は和やかな雰囲気でしたが、パイプオルガンが響き渡ると式典は厳かに進められました。受講生たちは、吉岡知哉学長（立教大学総長）から「学ぶという営みは、自己の内部に複数の他者を導き入れる作業です。そのためには、自分が変化していく能力を持たなければなりません」「好奇心を持続させて、学ぶことの歓喜を味わってください」と訓辞を受け、久しぶりに学びに対する情熱を燃やし始めました。

五十嵐正司チャプレン長の祝祷を受け、校歌と聖歌が流れる中、新しい学生生活への期待と喜びを胸に刻みました。

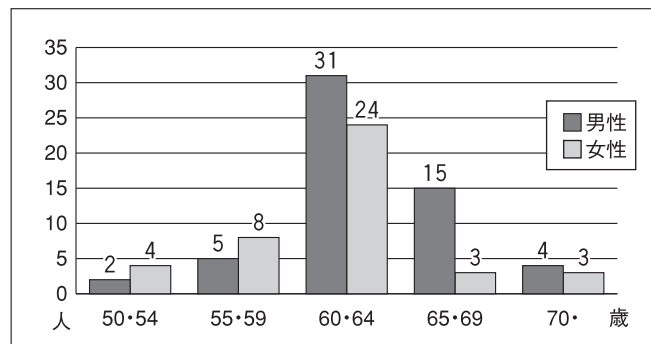


本科生の横顔

「編集委員会によるアンケート結果（6月上旬実施）」
〈回答者99人〉

■性別・年齢

男性57人、女性42人で、平均年齢は62歳です。最年長75歳から最年少51歳と年齢幅は24歳で、最多年齢は60歳の22人です。年齢層別分布は次のグラフの通りです。



■職業（前職または現職）

会社員、公務員など勤務経験者が72%です。自営業者（13%）、主婦（13%）もいます。また在職中も9%です。

■居住地・通学時間

東京（38人）、埼玉（30人）、千葉（12人）、神奈川（9人）と東京近郊で90%ですが、高知、和歌山、長野、新潟からも転居や仮住まい、新幹線通学をしてまでRSSCで学ぶ情熱にあふれた人たちがいます。

通学時間は1時間半以内が大半です。新幹線通学を含め3時間超の人もあります。

■通学日数

週4日の人が最も多く（42人）、3日（27人）、5日（21人）と続き、何と土曜日を含めて週6日通学という向学心の塊のような人が2人います。

■受講科目数

最も多いのが上限数の10科目（25人）で、約70%が8科目以上受講しています。

3日間の夏期集中講義もあり、受講予定者は90%以上います。

また、学部学生との共通授業も関心が高く、半数以上が受講しています。

（注）RSSC本科を修了するには、必修科目3科目（うち1科目はゼミナール）と選択科目5科目以上の修得が必要です。前期に受講できる科目数は必修科目2科目を含めて10科目が上限です。なお、選択科目は、本科生だけではなく専攻科生、聴講生も受講しています。

■入学の動機・社会貢献活動への関心

「セカンドステージの生き方探し」が34%、「教養・専門分野の学習」21%、「生涯学習の一環」19%、「大学での勉強」11%と続きます。社会貢献活動への関心も高く、NPOやボランティア活動をしているが30人、検討中が22人、今後かわりたいが38人と90%超の人が関心を持っています。

■大学の施設の利用状況

★ラウンジ

受講生専用のラウンジには、会議スペースや談話コーナー、数台のパソコンが設置され、受講生の交流や討議、レポート作成の貴重な場となっていて、半数の人が週1日以上利用しています。



★メディアセンター

メディアセンターにはパソコン教室が複数あり、だれでも利用可能で、電子メールや情報検索、レポート作成を行うことができます。学部学生によるサポート体制も充実しており、ITに不慣れな人にはスキルアップ講習会も頻繁に開催され、既に約3分の1の人が受講済みで、3分の1の人が今後、受講予定です。

★食堂ほか

池袋キャンパスには、食堂、売店、コーヒESHOPがあります。80%以上の人が利用したことがあると回答しており、最も利用されている第一食堂では、学部学生に交じって堂々と昼食をとり、団らんしている光景をよく見かけます。食堂での昼食だけではなく、夜のゼミ単位の懇親会も仲間との交流の機会になっています。仲間との飲食の機会は週1回、2週に1回、月1回が多いものの、中には毎日という人もいます。

授 業

「現代史の中の自分史」

◆書く中で自分の成長を確認

「自分史」を書く作業は報告書とは異なります。「自己確認」であり、自身の「成長」を確認する作業です。担当の内海靖彦先生は、多くの事例を示しながら私たちに説明して下さいます。今日もクラスメートの提出作品が取り上げられました。「皆さんにも共通することですから」と、赤字が入った箇所をていねいに解説されます。また時には、「自分史を書く“覚悟”がまだできていませんね」「だれに向けて書くのですか」など厳しいお言葉をいただくこともあります。

受講生は、原稿用紙5～10枚程度の作品を毎週、提出することになっています。限られた時間の中で、どこまでそれぞれの「人生」を書けるかは分かりませんが、「書く」という作業を習慣付けていき、いただいたアドバイスを作品に反映させながら、自分史を書きあげる手掛かりとなればよいと思っています。

「自分のからだと言葉を取り戻す」

鈴木理江子先生の「自分のからだと言葉を取り戻す」という授業では、主に呼吸法を学習しています。胸腔に空気を取り入れて、おなかをふくらませる腹式呼吸です。

人間には吐くためだけの筋肉はないため、「吸うはやすく吐くのは難しい」ということになります。そこで横隔膜を使い、体操を取り入れて普段使っていない筋肉を鍛

■講義・ゼミナールについての感想

「講義は興味深く、充実していますか？」

そう思う (57%)、どちらかといえばそう思う (34%) と90%超が満足しています。

「講義では自分が、積極的に質問や発言していますか？」

そう思う (17%)、どちらかといえばそう思う (40%) で57%が積極的に受講していると思っていますが、始まって2カ月の時点なので、少し控えめな受講態度の人もあり、特に女性が目立ちます。

「ゼミでの議論は活発で、刺激になっていますか？」

そう思う (29%)、どちらかといえばそう思う (55%)。ゼミナールの場が先生の熱心な指導やゼミ生同士の活発な議論で刺激的な場になっていることがうかがわれます。

「ゼミ担当の先生との交流は真摯で親密なものですか？」

そう思う (39%)、どちらかといえばそう思う (45%)。修了論文のテーマ選定、構想発表や7月のゼミ発表に向けた意見集約等の機会を通じて、先生との真剣で熱い議論が交わされています。また、ゼミ終了後には先生も参加されての懇親会も度々行われ、教室の議論を居酒屋に持ち込んだり、趣味や世相の話題に盛り上がっています。

〈アンケートが映し出す典型的な本科生像〉

男女とも60歳代前半の東京もしくは埼玉在住。会社勤めを終え、「生き方がし」と「学び直し」のため入学。週4日通学し、講座やゼミ活動に自主的に取り組みつつ、RS SCで出会った仲間とのかけがえのない時間を満喫中。

紹 介

「情報生産者になるPart 1」

◆シニアが研究に挑戦?!

「それは研究とは言わない」「あなたは何をしたいの」。上野千鶴子先生の「情報生産者になるPart 1」の授業では、先生から容赦なく厳しいコメントが飛んできます。シニアの学生が「情報消費者」から「情報生産者」になるために、研究の基本を講義と実習を通して習得していくのがこの授業の趣旨です。各自が豊富な人生経験の中から研究テーマを選定、それを基に研究計画書を作り、フィールドワークを通じてデータを収集、分析し、一年間かけて仮説を証明しながら論文にまとめていくことになります。

毎回、受講生12人全員が発言し、それぞれの研究について全員からコメントが寄せられます。回を重ねるごとに皆の発言のレベルが向上していくのが実感でき、上野先生と一緒に開講当時の自分たちのことを笑い飛ばしています。



えて習慣化した体を見直していくというのがこの授業の狙いです。

呼吸法を取り入れながら体を自分の限界に近いところまで動かしていきます。力を抜いた死体のポーズや、木のポーズなど、普段、気がつかない気配を感じると動作も学んでいます。

RSSCのカリキュラムは3つの科目群のほか、ゼミナールがあります。受講生すべてが8人の教員が担当するいずれかのゼミナールに所属して、指導教員のもと前期・後期の1年間、希望するテーマを研究して、修了論文を作

本科ゼミ

千石ゼミ

◇ゆるーく、アカデミックに



比較文学、文芸批評、そして現代美術を専門とされる千石英世先生。先生の「ゆるーく、しかしアカデミックにやりま

しょう」というモットーのもと、ゼミ生はバラエティーに富んだ修了論文のテーマを決め、発表を行いました。

一人ひとり、先生のアドバイスを受け、今後の論文の進め方を模索中です。また自主ゼミでは、先生が翻訳された19世紀のアメリカ文学の名作、メルヴィルの『白鯨』の読書会を開催。ゼミ発表について議論を戦わせたほか、飲み会の席では履修している授業の情報交換で盛り上がりました。4月に初めて顔を合わせて硬くなっていたころから比べるとずっと打ち解けて、お互いのバックグラウンドなども知り合うことができてきました。

これからもゼミ友として助け合い、切磋琢磨して、セカンドステージの学生生活を有意義なものにしていきたいと思っています。

上田ゼミ

◇笑顔で語る鳥の世界

「子どものころは、野山を駆け巡り、昆虫と鳥を追いかけていました」と、笑顔で語る上田恵介先生。上田先生の専門分野は、生物多様性、進化、動物生態学、特に鳥類です。生きがい再発見、そして知力・気力を充電させながらキャンパスライフに胸を躍らせている私たちが修了論文を心配すると、「ゼミの仲間と意見を交わし、各自がテーマを深く考えて書くことが、セカンドステージ大学の真髄です」と、勇気づけてくださいます。ゼミ



では、気兼ねなく意見を出し合い、それぞれの持ち味も発揮され、毎回、充実した時間を過ごしています。ゼミ仲間のさまざまな分野での体験談や専門的な知識に刺激を受けながら、互いに学び、かつ、学びを楽しんでいます。ゼミの後の親睦会では、上田先生の国内外での鳥の調査研究に関する興味深いお話をうかがうことができて、私たちは鳥についてもかなり詳しくなれそうです。

鳥飼ゼミ

◇多彩な経歴、活発な意見交換

鳥飼玖美子先生は高校、大学院時代に米国に留学。英語の世界で仕事や研究をされてきました。英語や他の外国語に堪能な先生ですが、考え方は日本人そのもので、現在の英語教育について厳しいご意見をお持ちです。

鳥飼ゼミは多彩な経歴の持ち主の集まりで、最初から活発に意見交換が行われています。サブゼミの発表テーマについても、ゼミ長のリーダーシップのもと、大いに議論し一回目で決定しました。また、役割分担もすぐに決まり、チームワーク抜群のゼミです。討論の中心はコミュニティ形成（町内会、自治会）の歴史、現状、将来で、掘り下げれば掘り下げるとほど難しい問題です。少子高齢化や人口減少に向かっているわが国のあり方が議論の対象になりそうです。



今後もゼミのメンバーで対話を続けていくことに大きな楽しさを感じています。

菊野ゼミ

◇サブゼミで高齢者対策を調査

菊野一雄先生のご専門は労務管理、経営学です。現代社会における、まさに差し迫った課題を研究してこられました。ゼミは「現代社会に生きる」の主題に則して、それぞれが関心を持っていることを話し合うことからスタート。先生の指導のもと、ゼミ生の関心事を集約して「高齢化社会とコミュニティ」をテーマにしました。

前期は、後期活動の足場固めと位置づけ、まず各自が住むコミュニティの現状を調べています。



修了論文については、ゼミ活動の傍ら、各自で準備を進めています。その上で、論文のテーマを提出。そのテーマを選んだ問題意識、論文の構成、そして参考文献などを、報告しあっているところです。

ナール紹介

成することになっています。

また、隔週に開かれるゼミ生のための自主ゼミでは、「現代社会を生きる」という統一テーマの中から関心のある課題、問題を選び、各ゼミで討論して発表会を開きました。

古賀ゼミ

◇クールな人たちがヒートアップ

古賀義弘先生は、造船業の分析からの産業論がご専門ですが、都市工学、交通工学、医学など異分野の人たちとの交流が、自己の研究に新たな視点を育む大きな契機になったそうです。ゼミ生の中には福島、高知、群馬から来た人もいます。ゼミは、さまざまな分野の出身者で



構成されており、正に交流の実践の場となっています。

ゼミは、先生のアドバイスで『日本の歴史をよみなおす』と

いう本からスタートしました。ゼミ生は、意気込みの割には口数が少なく、クールな人たちが多いため、最初は先生も一人ひとりへのフォローが大変だったと思います。しかし今では、先生の口数が少なくなるほどゼミの発表テーマに向けて活発な意見交換が続いています。ゼミ終了後、定例となっている懇親会では、回を重ねるごとに会話もヒートアップし、笑いも巻き起こっています。現在は、メンバーが交代で協力し合いながらの舵取りで、目標に向かって「古賀丸」が航海中です。

高橋ゼミ

◇ざっくばらんにアドバイス

高橋輝暁先生はドイツ文学・哲学、日独比較対照文学化学がご専門です。ドイツ文学というやや堅苦しいイメージを離



れ、肩肘張らず、ざっくばらんに各ゼミ生の個人テーマの発表に指導とアドバイスをしてくださり、その教養の豊かさを感じています。

メンバーの年齢や、第一ステージでの職業はさまざまですが、いずれも第二ステージでの時間をいかに有意義に送るかについて考えており、それだけに仲間づくりにとても熱心です。そうしたことから、ゼミナールの時間はもちろん、先生を交えて飲み会の場でも自由、活発な意見交換をしています。

ゼミの発表では、「現代社会を生きる」という共通テーマを踏まえ、「高齢化社会の問題点や課題克服のために何をすべきか」という問いを中心に討論を積み重ねました。そこでは、従来のしがらみから自由なセカンドステージの活用も課題になりました。

鈴木ゼミ

◇原発事故にも説得力ある説明

鈴木正男先生は、人類学、特に放射性同位体による年代測定を用いた人類年代学がご専門で「人類の来た道のりを測る」という科目を担当されています。また、立教



大学原子炉の管理室長も務められ、現在、その廃炉作業にも携わられています。ゼミで福島原発事故が話題に上ると先生

は、体験に裏打ちされた説得力のある説明を分かりやすくしてくださいます。

ゼミでは、主にサブゼミを使ってゼミ生が順番にレポートの発表を行っています。あまり堅苦しく考えずに、持ち時間の中であれば形式も自由です。テーマについては特に制限がないので、修了論文に関連する内容であったり、いま、興味、関心のあることであったりと広範囲にわたっています。毎回、新たな発見や刺激を受けて楽しい意見交換の時間を送り、次の飲み会の会場へと教室を後にします。

横山ゼミ

◇時には哲学的なコメントも

横山ゼミは、唯識思想、仏教心理学、インド哲学を専門とする横山紘一先生を中心としたゼミです。

横山先生を囲んでのゼミの時間は、1回に2、3人が修了論文のテーマについて説明、それについて他のゼミ生からの質問を受けたり、意見交換を行っています。ゼミ生だけが出席するサブゼミの時間には、「健康長寿」など受講生に共通のテーマを議論しました。

意見交換は非常に活発で、次から次に意見が出てきます。さまざまな経験を積み、さらにセカンドステージを有意義に生きていこうとしているメンバーとあって、興味深いディスカッションとなります。横山先生は飄々としながらも、時に哲学的なコメントで皆に考えさせたり煙にまいたり。

お酒好きな横山先生、同じくお酒と話好きなゼミ生で課外討論も活発に行っている楽しいゼミです。



専攻科ゼミナール紹介

庄司
グループ

14人で地域貢献などを議論

庄司グループ研究会は、女性6人、男性8人で活動しています。今年度から専攻科ゼミに課題解決型学習（PBL）が導入され戸惑いもありましたが、研究の方向性を定めるため知恵を絞っているところです。当研究会では「これからの生き方を考える⇒地域貢献・地域ネットワーク・地域デビュー⇒ソーシャル・キャピタルの検討⇒個々の問題意識の整理・研究」と議論を重ねてきました。専門が社会学の庄司洋子先生のアドバイスをいただき、14人の考えを尊重しながら研究を進めています。終了後には、先生も参加されて懇親会を開き、議論に花を咲かせています。

笠原
グループ

ビジネスモデルの構築が目標

われわれのグループはソーシャルビジネス（SB）を研究しています。笠原清志先生は、SBの学識と実践に優れ、昨年度は立教大学経営学部ゼミ生たちが日経GSRプロジェクト「第3回学生アイデア・コンテスト」で優秀賞を受賞しています。先生のゼミ生が提案したのは、ベネッセホールディングスと資生堂のリソースを利用した「ミャンマーの寺子屋支援を通じて、公衆衛生の普及と学力の向上を目指す」というビジネスモデルでした。われわれも、このゼミ生に負けないくらいのビジネスモデルの構築を目指し、座学のみならず、空き家の有効利用などのフィールドワークにも精を出しています。

坪野谷
グループ

課題解決型学習に挑戦

坪野谷グループの担当教員である坪野谷雅之先生は金融論、実体経済論を専門にされています。元来の明るさに加え、われわれゼミ生の目線で物事を考えてくださる素晴らしい先生です。こんな先生の指導のもとゼミ生は初めての試みの課題解決型学習（PBL）に挑戦中です。メンバーの個人的関心は多岐にわたりますが、白熱した討論の結果、地域社会（コミュニティ）を多角的に研究することになりました。「元気で明るく、楽しく、そして賢く生きる」を合言葉に活発なグループ活動を展開しようと頑張っています。

木下
グループ

次世代に何を伝えるかを模索

木下グループでは、課題解決型学習（PBL）に取り組んでいます。

木下康仁先生のご専門である「社会老年学」をベースに、「生き生き2030成熟社会計画」をテーマに選び、グループリーダーのもと、13人が英知を結集しています。

何かと先行きが不透明な将来に対して、お手本がない日本の社会。私たちが自主自立の精神で、次世代に何を残し、何を伝え、どう生きるべきかを模索中です。

木下先生がセッティングしてくださった社会学部の学生との交流は、シニアと若者が世代を超えた相互理解の場となっています。

本科受講生の声

76歳、あり余った時間を学びに

38歳でサラリーマン生活に終止符をうち、起業して72歳までビジネス一筋の生活でした。会社を経営している間は、業績と社員の生活を少しでもよくすることを考える毎日でした。社業に徹するため、取引先とのコミュニケーションが優先になり、プライベートで気楽に話ができる友人とも疎遠になりました。自分の行動や言動がすべて会社の業績につながることを目的とした日常が長く続きました。



静 眞一郎さん

4年前に後継者に会社の経営を託したとたんに、一日の過ごし方をどうしたらいいのか困るほどの、時間ができてしまいました。その後、生まれて初めての入院、手術も体験しましたが、体の調子も戻り、何をしたらいいのか考えていたときにRSSCを知りました。

多方面で活躍されてきた皆さんと共に学び、過ごせることの幸せを感じています。

“夫育て”や子育てが終わり、主婦業も上がったりで、そろそろ自分のために「ひと手間」かけてみようかと考えていたころ、RSSCの受講生募集の記事に出会いました。普段、新聞は三面から読んでいただけに、履修登録した「暮らしに役立つ経済と金融」の授業は緊張して臨みました。ところが、「分かりにくいことを分かりやすく、分かりやすいことを面白く」を実践してくださる先生の講義にはまってしまい、新聞の読み方が変わりました。

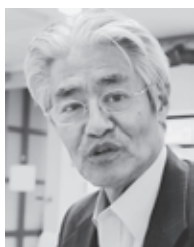


大橋 光代さん

日ごろ、うっとうしい夫の新聞ネタの話も面白く思えてきて、夫婦の会話が思わぬところで生まれるという、副産物もありました。また、ビジネス科目の先生からは「主婦目線からの着眼点がビジネスチャンスを生む」というお話を聞き、踏み出した一歩によって眠っていた体の一部が、動き始めたような新鮮さを感じています。

主婦業から新鮮な第一歩

家族と離れ、勉強のし直し



笠原 英男さん

苦しています。

RSSCの入学は、私が20代から描いていた人生計画の一環で、60代を過ぎたらビジネスの一線から退き、体が続く限り活動するための基礎を学ぶ大切な場として考えていました。単身で一人暮らしを始めたのも、大学の近くにアパートを借りたほうが通学のコストより経済的にも勝り、体も楽だと判断したからです。確かに通えない距離ではないのですが、大学に入った意味を考えれば、知識の吸収だけでなく、多くの学友と知り合い、これから先の活動にも生きる人脈をつくるほうがより大事なことと思ったからです。自分の引き際と、事業の継承をした息子の成長を図るために、息子とカミさんに大学で勉強し直すことを伝え、カミさんからの仕送りを頼りに楽しく学生生活を送っています。

私は長野市内で飲食店を営んでいます。RSSCで学ぶため丸40年ぶりに単身でアパート暮らしをしています。学業のためとはいえ、長年の結婚生活ですべてカミさん任せのツケを払わされたような慣れないお一人さま生活では、食事から買い物、洗濯、掃除、ゴミ出しとあらゆる場面で四苦八

郡山市から遠距離通学

高速バス、それに新幹線を利用して福島県郡山市から遠距離通学をしています。“物好きネ”という友人や周囲の声をよそに、何十年ぶりの学生生活。午後は講義を受講し、時間の空いている午前中は“学生証”をしっかりと活用して都内の美術館、名所旧跡めぐりと東京見物を楽しんでいます。



本田 裕子さん

今年、37年間の教職人生を終え、セカンドステージに向けての情報収集と充電を兼ねて参加したのですが、大学で出会うクラスメートは、皆、年齢を感じさせず、生き生きとして魅力的です。毎日の講義も新鮮で、学ぶことの充実感を久しぶりに味わっています。しかし、それにつけても、いかに今まで自分の仕事以外、何も知らなかったか痛感させられる日々です。これから人生の第2段階をいかに送るか、また、時間のない現役世代のために、何をしてあげられるか、ゆっくりと考えていきたいと思っています。

仕事と受講を両立



小堀 公男さん

何とも言えない“解放感”。これが仕事を切り上げて立教通りを歩いて大学に向かう時の気分です。私はまだ週に2～3回の頻度で仕事を続けているため、午後の授業と重なる日は授業に間に合うように会社を出ています。ネットの発達もあり、持ち歩いているスマートフォンで会社のメールなどは拾えるため、通学途中や授業の合間でも仕事上の急ぐ用件には対応できます。幸いなことに、これまでのところ仕事の都合で授業を欠席することなく済んでいます。

それでも仕事を引きずって気分の重い日もありますが、授業が始まって先生の話に集中していると仕事を忘れ、新たな知識との出会いもあって気分が晴れてきます。また、いろいろな経歴を持つ受講生の皆さんとの交流も元気の源です。特にゼミでは仕事の都合で迷惑をかけることもあります。そのような時でもゼミの仲間は私の分まで当然のごとくカバーしてくれます。

当初は仕事を持ったままRSSCでの学習が続けられるか不安もありましたが、今では仲間に支えられ元気づけられ、そして、少し甘えさせてもらっていますが、続けていける希望が見えてきました。せっかく得られた素晴らしいこの機会を、これからもますます生かしていきたいと思っています。

かなえられた45年間の夢

五年前に、立教セカンドステージ大学新規開校の新聞記事を偶然読んだ時、私の進むべき道の発見に胸が高鳴りました。その時、定年退職したら絶対入学したいと、心に決めました。受験の一年半前から、課題エッセーもしっかり作成しているほどの楽しみようでした。



吉田 昌美さん

私は家庭の事情で、大学進学を諦めたのです。今までの人生で唯一やり残したことで、大学に行って勉強をしたかった。その四十五年間の夢が今、かなえられるのです。待ちに待った出願書類提出日。もちろん、初日に提出です。何十年ぶりのドキドキの面接試験、そして手にした合格通知。

待ちに待った入学式当日は、大荒れの春嵐でした。まるで私のやり残した過去を洗い流すかのように。そして今、取り戻した過去。私は憧れだった花の女子大生。勉強に友情に、念願のキャンパス生活を満喫しています。

池袋キャンパス図書館の紹介



地下2階から地上3階までの5フロアに200万冊、1520席の閲覧席数を擁する国内の大学でも屈指の図書館で、2012年11月にオープンしたばかりです。国内外の新聞、雑誌、論文などを検索できる各種オンラインデータベースも整備されています。

レポートや論文作成のためのラーニングアドバイザーがいるなど、学習支援サービ

スも行われているのがこの図書館の特徴です。さらに、グループ学習室が8室あるほか、パソコンの貸し出し、パソコン・ヘルプ・サービスもあり学習・研究活動のための支援体制が充実しています。

図書館では、学部生に交じって本を読むRSSCの受講生の姿も見られます。RSSCの受講生へのアンケートによると、

55%の受講生が毎日、ないしは、週に1、2回、図書館を利用しています。その声を聞くと「明るくて開放的」「閲覧席が広くて使いやすい」「貸し出し用のノートパソコンが便利」「多くの学生が勉強しているので自分もやる気が出る」「飲料（キャップ付き）を席まで持ち込めるのがよい」など、好評です。

異文化研究会

異文化研究会は、さまざまな国の異文化情報に関心のある人たちによる研究会です。毎月、異文化理解のための講演会を開催しています。講師には海外駐在経験のあるRSSCの受講生や異文化関連の研究者などをお招きしています。

最近では共同通信社ニューヨーク特派員や海外取材の



経験が長い6期生の鷺見徹也さんの講演会を行いました。また、日本の古典芸能（能・狂言・歌舞伎・文楽・落語など）を理解するための鑑賞会も行っています。会員は1期生から6期生まで幅広く、さらに異文化に関心のある方の加入をお待ちしています。

バードウォッチング

上田恵介先生の授業「生命の多様性」では、

自然界・生態系の仕組みを学び、そこに生きる生物の姿を肌で感じて、自然の大切さ、生き物の命のいとおしさを学ぶことを目標としています。講義以外に野外に出て観察会を行っています。



4月20日（土）は、上野・不忍池でバードウォッチングを行いました。先生の解説を基に、ダイサギ、コサギ、ゴイサギ、アオサギの違いを観察し、10年ぐらい前からビルの屋上に巣をつくって繁殖しているウミネコに生命のたくましさを感じました。「渡り」に取り残された冬鳥（キンクロハジロ、オナガガモ、ユリカモメ）などを含め、23種類の鳥を確認することができました。

「としまコラボクラブ」発足

地元「としまNPO推進協議会」との協働企画
代表：坂田博久
顧問：坪野谷雅之先生
古賀義弘先生



「としまコラボクラブ」はRSSC有志と、としまNPO推進協議会とのコラボレーションチームです。活動内容は、小学生とのそば打ちや川遊びなどの「いけぶくろ自然クラブ」、高齢者と一緒に給食を食べる「おたっしや給食」、それに、フリーマーケットなどが出店する「えんがわ市」や生涯学習施設「みらい館大明」の講座の企画など、多彩です。

写真は6月9日、池袋第二公園で行われた「えんがわ市」にスタッフとして参加した7人の会員。会員は豊島区の在住者だけではなく、豊島区での活動を通じて、そのノウハウの習得と実践演習で、やがては、会員それぞれの地域での活動に生かしてほしいというのがこのクラブの趣旨です。ただいま6期生の会員を募集しています。

編集後記

4月、吹きすさぶ嵐の中、チャペルでの入学式は温かく感動的でした。心のこもった学長のご挨拶に迎えられ、期待に満ちたキャンパスライフがスタート。多くの人が、選択したカリキュラムを満喫し、仲間づくりを楽しみました。このような様子を共有し伝達する役割をここに果たせましたことは、編集委員の代表として誇りに思い、また喜びとするところであります。

アンケートにご協力いただいた方々、快く原稿を書いてくださった方々、また、事務局の皆様にご心よりお礼を申し上げます。（編集長・堀本）

【編集委員】児玉尚彦（千石ゼミ）／板垣杉子（上田ゼミ）／牧 幸子（鳥飼ゼミ）／渋谷 茂（菊野ゼミ）／小寺謙次（古賀ゼミ）／都丸 豊（鈴木ゼミ）／鷺見徹也（横山ゼミ）／堀本恵子（高橋ゼミ）